[illegible]凡全集 第十五卷

荀風全集

第十五卷

岩波書店

昭和三十八年十一月十二日　第一刷發行
昭和四十七年　四　月　五　日　第二刷發行

荷風全集第十五卷
定價八百五十圓

著者　永井壯吉
發行者　岩波雄二郎
發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

©第十五回配本　精興社印刷　牧製本

目次

麻布襍記……一
花火……五
砂糖……一九
寫況雜記……二七
十年振……三九
梅雨晴……五七
十日の菊……六九
偏奇館漫錄……八三
偏奇館漫錄拾遺……一二三
隱居のこゞと……一四七
鷗外先生……二三七

鷗外先生……二二九
森先生の事……二三一
鷗外全集刊行の記……二三四
七月九日の記……二三九
鷗外全集を讀む……二四六
森先生の伊澤蘭軒を讀む……二四八
東京堂版鷗外選集廣告文……二五四
東京堂版鷗外選集第八卷解說……二五五
鷗外記念館のこと……二六三
佛蘭西人の觀たる鷗外先生……二六六
下谷叢話……二七一
菫齋漫筆……四六五
大田南畝年譜……五三三
爲永春水……五五七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

爲永春水年譜……五八九
後　記……六〇一

麻布襍記

叙

麻布樓記收むるところの小說雜錄隨筆のたぐひ皆そのをり〳〵月刊文學雜誌の囑を受けて一時の責を塞ぎしものに過ぎず。五とせ以前築地より麻布に移りすみてこゝに筆をとりしもの多ければかくは名づけたるなり。思へば麻布に移りてよりこの五とせが間には悲しきことの多かりき。嚴師森夫子は千朶山房に簀を易へたまひ又莫逆の友九穗井上君は飄然として道山に歸りぬ。爾來われは敎を請ふべき師長もなくまた歡び語るべき伴侶もなし。衰病の孤身うたゝ寂寞のおもひに堪へやらず文筆の興も從つて亦日に日に索然たり。されば復び拙著を刊行する心もあらざりしが春陽書樓の主人震災の後頻に訪來りてすゝむるものから遂にこばみがたく拙劣の一集またこゝに成るを見たり。大正十三年甲子の歲仲夏荷風病客麻布窮巷の陋居にしるす。

花

火

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

午飯の箸を取らうとした時ポンと何處かで花火の音がした。梅雨も漸く明けぢかい曇つた日である。涼しい風が絶えず窓の簾を動かしてゐる。見れば狹い路地裏の家々には軒並に國旗が出してあつた。國旗のないのはわが家の格子戸ばかりである。わたしは始めて今日は東京市歐洲戰爭講和記念祭の當日であることを思出した。

午飯をすますとわたしは昨日から張りかけた押入の壁を張つてしまはうと、手拭で斜に片袖を結び上げて刷毛を取つた。

去年の暮押詰つて、然も雪のちらほら降り出した日であつた。この路地裏に引越した其日から押入の壁土のざら〳〵落ちるのが氣になつてならなかつたが、いつか其の儘半年たつてしまつたのだ。過ぐる年まだ家には母もすこやかに妻もあつた頃、廣い二階の緣側で穩かな小春の日を浴びながら藏書の裏打をした事があつた。それから何時ともなくわたしは用のない退屈な折々糊仕事をするやうになつた。年をとると段々妙な癖が出る。

わたしは日頃手習した紙片やいつ書捨てたとも知れぬ草稿のきれはし、また友達の文反古なぞ、

一枚々々何が書いてあるかと熱心に讀み返しながら押入の壁を張つて行つた。花火はつゞいて上る。

然し路地の内は不思議なほど靜かである。表通りに何か事あれば忽ちあつちこつちの格子戸の明く音と共に駈け出す下駄の音のするのに、今日に限つて子供の騒ぐ聲もせず近所の女房の話聲も聞えない。路地の突當りにある鍍金屋の鑢の響もしない。みんな日比谷か上野へでも出掛けたにちがひない。花火の音につれて耳をすますとかすかに人の叫ぶ聲も聞える。わたしは壁に張つた草稿を讀みながら、ふと自分の身の上がいかに世間から掛離れてゐるかを感じた。われながら可笑しい。又悲しいやうな淋しいやうな氣もする。何故といふにわたしは鞏固な意志があつて殊更世間から掛離れやうと思つた譯でもない。いつとなく知らず〳〵斯ういふ孤獨の身になつてしまつたからである。世間と自分との間には今何一つ直接の連絡もない。

涼しい風は絶えず汚れた簾を動かしてゐる。曇つた空は簾越しに一際夢見るが如くどんよりとしてゐる。花火の響はだん〳〵景氣がよくなつた。わたしは學校や工場が休になつて、町の角々に杉の葉を結びつけた綠門が立ち、表通りの商店に紅白の幔幕が引かれ、國旗と提灯がかゝげられ、新聞の第一面に讀みにくい漢文調の祝辭が載せられ、人がぞろ〳〵日比谷か上野へ出掛ける。どうかすると藝者が行列する。夜になると提灯行列がある。そして子供や婆さんが踏殺される……さう云ふ祭日のさまを思ひ浮べた。これは明治の新時代が西洋から模倣して新に作り出した現象の一で

ある。東京市民が無邪氣に江戸時代から傳承して來た氏神の祭禮や佛寺の開帳とは全く其の外形と精神とを異にしたものである。氏神の祭禮には町内の若者がたらふく酒に醉ひ小僧や奉公人が赤飯の馳走にありつく。新しい形式の祭には屢政治的策略が潜んでゐる。

わたしは子供の時から見覺えてゐる新しい祭日の事を思ひ返すともなく思ひ返した。

明治二十三年の二月に憲法發布の祝賀祭があつた。おそらく此れがわたしの記憶する社會的祭日の最初のものであらう。數へて見ると十二歳の春、小石川の家にゐた時である。寒いので何處へも外へは出なかつたが然し提灯行列といふものゝ始まりは此の祭日からであることをわたしは知つてゐる。又國民が國家に對して「萬歳」と呼ぶ言葉を覺えたのも確か此の時から始つたやうに記憶してゐる。何故といふに、その頃わたしの父親は帝國大學に勤めて居られたが、その日の夕方草鞋ばきで赤い襷を洋服の肩に結び赤い提灯を持つて出て行かれ夜晩く歸つて來られた。父は其の時今夜は大學の書生を大勢引連れ二重橋へ練り出して萬歳を三呼した話をされた。萬歳と云ふのは英語の何とやらいふ語を取つたもので、學者や書生が行列して何かするのは西洋にはよくある事だと遠い國の話をされた。然しわたしには何となく可笑しいやうな氣がしてよく其の意味がわからなかつた。

尤も其の日の朝わたしは高臺の崖の上に立つてゐる小石川の家の緣側から、いろ〳〵な旗や幟が塀外の往來を通つて行くのを見た。そして旗や幟にかいてある文字によつて、わたしは其頃見馴れ

た富士講や大山參なぞと其日の行列とは全く性質の異つたものである事だけは、どうやら分つてゐたらしい。

大津の町で露西亞の皇太子が巡査に斬られた。この騷には一國を擧げて朝野共に震駭したのは事實らしい。子供ながらわたしは何とも知らぬ恐怖を感じた事を記憶してゐる。その頃加藤清正がまだ朝鮮に生きてゐるとか、西郷隆盛が北海道にかくれてゐて日本を助けに來るとかいふ噂があつた。しかも斯くの如き流言蜚語が何とも知れず空恐しく矢張わたし達子供の心を動かした。今から回想すると其の頃の東京は、黑船の噂をした江戸時代と同じやうに、ひつそりして薄暗く、路行く人の雪駄の音靜に犬の聲さびしく、西風の樹を動かす音ばかりしてゐたやうな氣がする。

祭と騷動とは世間のがや〳〵する事に於いて似通つてゐる。

十六の年の夏大川端の水練場に通つてゐた。或日の夕方河の中からわたしは號外賣が河岸通をば大聲に呼びながら馳けて行くのを見た。これが日清戰爭の開始であつた。翌年小田原の大西病院といふに轉地療養してゐた時馬關條約が成立つた。然し首都を離れた病院の內部にはかの遼東還附に對する悲憤の聲も更に反響を傳へなかつた。わたしは唯藥局の書生が或朝大きな聲で新聞の社說を

朗讀してゐるのを聞いたばかりである。わたしは其の頃から博文館が出版し出した帝國文庫をば第一卷の太閤記から引續いて熱心に讀み耽つてゐた。夏は梅の實熟し冬は蜜柑の色づく彼の小田原の古驛はわたしには一生の中最も平和幸福なる記憶を殘すばかりである。

明治三十一年に奠都三十年祭が上野に開かれた。櫻のさいてゐた事を覺えてゐるので四月初めにちがひない。式場外の廣小路で人が大勢踏み殺されたといふ噂があつた。

明治三十七年日露の開戰を知つたのは米國タコマに居た時である。わたしは號外を手にした時無論非常に感激した。然しそれは甚幸福なる感激であつた。私は元寇の時のやうに外敵が故鄕の野を荒し同胞を屠りに來るものとは思はなかつた。萬々一非常に不幸な場合になつたとしても近世文明の精神と世界國際の關係とは獨り一國をして斯の如き悲境に立至らしめる事はあるまいと云ふやうな氣がした。基督敎の信仰と羅馬以降の法律の精神にはまだ〳〵憑據するに足るべき力があるもののやうに思ひなしてゐたのだ。いかに戰爭だとて人と生れたからには此の度獨逸人が白耳義に於てなしたやうな罪惡を敢てし得るものではないと思つてゐたのだ。つまりわたしは號外を見て感激したけれど、然し直に父母の身の上を憂ふる程切迫した感情を抱かなかつたのである。ましてや報道

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.